

# 昭和初期における幼稚園と尋常小学校との連絡に関する教育史的考察～東京市保育会における資料調査を通して～

著者	西出 勉
雑誌名	北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	15
ページ	75-90
発行年	2015
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001295/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001295/</a>

# 昭和初期における幼稚園と尋常小学校との 連絡に関する教育史的考察

～東京市保育会における資料調査を通して～

A study of the educational history about the connection between a  
kindergarden and an elementary school on the early period of Syowa era  
～through the investigate material by Tokyo Nursery Association～

西 出 勉  
Tsutomu NISHIDE

## はじめに

幼稚園と小学校の連携・接続の問題は、倉橋惣三が大正時代に提言した「幼稚園から小学校へ」<sup>1)</sup>など、古くから語り継がれてきている。現行の小学校学習指導要領「生活」における内容の取扱い等では、改善の視点として「幼児教育との接続」について述べられている。具体的には幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科等との関連を図る指導を重視するとともに、小学校第1学年入学当初のスタートカリキュラムについて記述されている。学校生活への適応をねらいとした合科的な指導を展開しながら、幼稚園と小学校の滑らかな接続を実現しようとするものである。<sup>2)</sup>

また、最近では「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査協力者会議」が子どもの発達や学びの連続性、それを確保するための教育方法について報告しており、改めて幼小接続の取組が今日的な課題となっている。<sup>3)</sup>

本稿では昨今の幼稚園と小学校における連携・接続の実情や問題に鑑み、昭和初期における資料調査をもとに学校間の接続に関する当事者の認識や課題について考えていく。

## 1 研究の目的

本稿では昭和初期における幼稚園と小学校の連携・接続に関する資料調査の結果から、当時、幼稚園と小学校にはどのような認識があり、どんな問題を抱えていたのかを今日的な視点から明らかにしていくことを目的とする。

## 2 研究の方法

本稿では1939年（昭和14年）に「幼児の教育」に掲載された「幼稚園と尋常小学校との連絡

に関する資料調査（上・中・三・四）」（東京市保育会）の結果をもとに分析・考察を行う。

本資料調査は当時としては大規模な調査であり、多くの小学校の協力により実現したものである。これほどの実態調査が実現した背景には、幼稚園から小学校への移行を滑らかにしようとする双方の教員による熱い願いや思いがあったことが想像できる。また、今日の幼小連携・接続の問題を考える時、その調査事項や意見等からは多くの示唆を得ることができるものと考ええる。

本稿では実例や意見、批判と反省の記述内容から、当時の幼稚園及び小学校サイドの連携・接続に関する見方や考え方を分析し、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続に関する問題について考察することを試みたい。具体的な調査事項等は【表1】のようである。

【表1】＜「幼稚園と小学校の連絡問題研究調査用紙」より一部抜粋＞

1 一年入学当初、幼稚園から行きました子供は一般児童に比較して左記のどれでしょうか。○印をおつけください。余白へはこの他お気づきの点を御記入ください。

（1）「学習態度」に関する調査事項

- ① 注意力（集中する、持続する－あきやすい）
- ② 着眼点（着眼点がよい－変わりない）
- ③ 実行力（実行力がある－途中であきらめる）
- ④ 創作力（創作的である－模倣的である）
- ⑤ 想像力（想像力がある－乏しい）
- ⑥ 学習上の興味（学習に興味がある－少ない）

（2）「訓練方面」に関する調査事項

- ① 後始末（後始末をよくする－やりっぱなし）
- ② 物を大切にする（物を大切にする－粗末にする）
- ③ 自分のことは自分です（自分のことは自分です－依頼心が強い）
- ④ 友達との調和性（友達との調和性がある－少ない）
- ⑤ 衛生上の習慣（衛生上よい習慣がついている－いない）

（3）「体力方面」に関する調査事項

- ⑥ 体力（体力は強い－疲れやすい）

2 幼稚園から行きました子供の一年の終わり頃を、入学当初に比較してどうなったでしょうか？お気づきになった点をご記入下さい。（※ 調査事項は、1と同様）

3 一年の児童を新たにご担任された時に、左記の事項についてどんなお考えをお持ちでしょうか。ご記入をお願いします。

- （1）幼稚園保育を受けた子供に対して、どんな点を考慮してご指導でしょうか？
- （2）現在、幼稚園をでた児童の学級編成は混合組ですか、幼稚園組ですか？

幼稚園組の場合は、特にどんな点に注意をなさいますか？

(3) 幼稚園個性観察簿は役立ちますか？

4 幼稚園として小学校に対する左の希望についての御意見を御記入ください。

(1) 幼稚園と合同して児童に関する研究会または懇談会を開催されたし。

(2) 低学年担任訓導に保母の参観の交換会を開催せられたし。

(3) 一年生の学習を合科的に考慮せられたし。

5 幼稚園に対する希望を御記入下さい。

本稿では上記のいくつかの調査事項に着目し、調査結果や「実例及び意見」、「批判及び反省」の記述等から、その内容について分析・考察を試みる。

### 3 育成したい態度や能力

東京市保育会は、小学校における幼稚園出身の児童と一般児童とを比較する際に、「学習態度」「訓練方面」「体力方面」の大きく3つに分け、各方面についてはさらに具体的な調査事項を設定している。

これらの調査事項は、「注意力」や「実行力」、「想像力」等、どちらかと言えば「〇〇力」という児童の能力育成に視点を当てている項目、「後始末をよくする」「物を大事にする」「衛生上よい習慣がついている」等、主に基本的な生活習慣に着目した児童の態度形成に視点を当てている項目によって構成されている。本稿では能力育成や態度形成の項目を当時、求められていた子どもに育成したい能力や態度として捉え、考えていくことにしたい。

#### (1) 「学習態度」に関する調査

「学習態度」に関する調査については、【表1】のように①～⑥の6項目の観点を調査している。

調査に参加した学校数等の結果については、【巻末資料】のように示されており、さらに「入学当初と1年後の実例及び意見」と「批判及び反省」が記述されている。本稿では6項目の主な実例及び意見、批判と反省の記述から、若干の考察を試みたい。

**【表2】** <「学習態度」に関する実例及び意見、批判と反省より一部抜粋>

(1) 「学習態度」に関する調査事項

【注意力】(○：入学当初，■：1年後，◇：批判及び反省)

調査結果については「注意持続する：39.74%」「あきやすい：52.28%」とあきやすいと回答した学校の割合が多い傾向にある。

① ○ 教室内に於いて教師の話に耳を傾ける熱心な態度の多いのは、園体的教育を受

けた賜であらう。

- ② ○ 園体生活，教室に於ける作業になれている為か，集中持続せず。
- ③ ○ 既習事項が多い為，あき易い。
- ④ ■ 相変わらず私語多く，手いたずらをしたりわき見をする。
- ⑤ ◇ 一般的にあき易いということは，園体生活と教師になれているためでもあらうが，一面小学校教育の方法と幼稚園教育の方法との差異が甚だしいために生じた結果ではあるまいか。

#### 【着眼点】

- ⑥ ○ 図書，手工にすぐれている。
- ⑦ ◇ 事例の示すが如く，入学当初の良好なる状態はといえば，これは幼稚園時代に於ける観察作業の賜物ではなからうか。

#### 【実行力】

- ⑧ ○ 自主的に目的を認定して学習するが，自発的学修（手技，図書等）でないと早くあきる。
- ⑨ ◇ 事例「時間いっぱい努力する仕事に於いては，更に時間を要求し満足できる作品になるまで続ける。」この点は幼い子の取扱い上，自然に行われる傾向で，又現在の幼稚園（私立をも含む）経営上陥り易い点であると思われる。

【注意力】では，①の意見から，幼稚園を経験した児童の方が学校環境に対する適応や教師との人間関係においてより柔軟性があると認識されている。その一方で②，③，④等の記述からは，柔軟性を認めつつも一定の緊張感をもった集中力が欠落する傾向にあることを指摘している。「集中し持続する」とことと「あき易い」という子どもの状況は，日々の生活の中で表裏一体の関係にあり，「あき易い」については活動の「なれ」からくる緊張感の欠落や幼稚園生活で経験した学びが小学校の学習内容と重複していることが主要因として考えられる。

また，主な批判及び反省では「あき易い」という状況について⑤のように「教育方法の差異」に着目しているが，これは幼稚園教育と小学校教育の連携・接続に関する本質的な問題を指摘したものであり，今日的な課題であるとも言える。

【着眼点】や【実行力】については，概ね幼稚園を経験した児童が優位である意見が多い。特に⑥，⑦，⑧からは，図書や手技・手工，観察作業等の活動など，幼稚園時代の様々な経験の積み重ねから培われた自発的な学習や能力であると肯定的に認識されている。その一方⑨のような児童の姿については，幼稚園経営上陥り易い問題点として指摘している。

幼稚園教育では，幼児は身の回りにあるものや出来事に関心を示し，その幼児のやり方でかわり学んでいく。幼児の学びには，大人があらかじめ立てたねらいや目的に沿って，順序立てて言葉で教えられ学習するのではなく，幼児の関心や興味に応じて環境を選び，諸感覚を通して身体でかわり感じ取り，活動（遊び）しながら学んでいくという特質がある。<sup>4)</sup>

幼児の「満足できる作品になるまで続ける。」様子を見守りながら、環境の再構成を考慮してかかわろうとする教師の姿からは、幼稚園教育の原点をみることができる。当時の小学校教育との比較から相容れない教育方法の違いが「現在の幼稚園（私立をも含む）経営上陥り易い点であると思われる。」という記述に反映されたものと考ええる。

そして、この幼稚園と小学校の教育方法や教師像、教育観の違いが、現在もなお「連携・接続の本質的な問いかけ」として今日、脈々と受け継がれてきている。

【表 3】＜「学習態度」に関する事例及び意見，批判と反省より一部抜粋＞

（１）「学習態度」に関する調査事項

【創作力】（○：入学当初，■：１年後，◇：批判及び反省）

- ① ○ 手工に最もよく現れる。一同に一定の材料を与えて考案させるとよく考えて、独自の案をねり他を模倣することがない。

【想像力】

- ② ○ 色々な生活内容をもっている為に、思想が豊富で想像力に富む。特に図書、手工等に於いて其の実を見る。

【学習上の興味】

- ③ ◇ 現在、幼学校の学級編成は大部分が混合組である。この場合、幼稚園児と一般児との指導方法は自ら異なるべきであり、この点考慮されていると思うが、指導法の如何による事の大を感じる。

幼稚園及び小学校教育において【創作力】や【想像力】は、最も重視されている能力である。幼児の学びには「幼児の関心や興味に応じて環境を選び、諸感覚を通して身体でかかわり感じ取り、活動（遊び）しながら学んでいく。」<sup>5)</sup>という特質があり、想像力などはその学びのプロセスの中でこそ効果的に育成される能力であると考えからである。

当時の小学校サイドの意見では、幼稚園を経験した児童は「創作力」「想像力」ともに優れているという記述が多い。①及び②の実例からは、当時の幼稚園生活で繰り返される図書や手工等の活動を通して、幼児の創作力や想像力の育成が図られてきたことを示唆するものであり、そのよさが小学校の教育の中にも活かされ、つながっていたことを裏付けるものである。

【学習上の興味】は、今日の教科における評価規準「関心・意欲・態度」にもあるようにいつの時代にも大切な観点として位置付くものであり、本調査においても肯定的な事例及び意見が多い傾向にある。

しかし、当時の小学校の学級編成は混合組であり、③のような批判及び反省からは興味・関心の重要性は幼稚園とともに共有すべき観点ではあるが、当時の小学校には幼稚園とは指導方法に違いがあるという根強い認識があったことを伺い知ることができる。同様に重要視してい

る観点ではあっても、教育方法の違いから幼稚園児と一般児への教師のかかわり方に配慮しようとしている当時の見方・考え方は、時代を超えた幼小の連携・接続に関する共通の課題として考えることができる。

## （２）訓練及び体力方面に関する調査

「訓練及び体力方面」に関する調査については、【表１】にあるように①～⑥の６項目の観点から調査しており、１年後の児童の様子と比較しながら分析されている。本稿では①～⑥の６項目について、その主な事例及び意見、批判と反省の記述から考察を行う。

【表４】＜「訓練及び体力方面」に関する事例及び意見、批判と反省より一部抜粋＞

### （２）「訓練方面」に関する調査事項

【後始末】（○：入学当初，■：１年後，◇：批判及び反省）

- ① ○ 幼稚園生活という経験より得たる作業，その他の訓練保育上の良習慣よりの賜によりて。

#### 【物を大切に作る】

- ② ○ 幼稚園にて物の取扱いに慣れているから，例えば色紙，キビガラ等を無駄にせず，利用する習慣よりくると思われる。クレオン等小さくなくても大切に取扱う。

#### 【自分のことは自分でする】

- ③ 調査結果「自分のことは自分でする：49.72%」「依頼心が強い：44.87%」  
○ 学用品の出し入れ，レインコート等の取り片づけの際，自分でする。
- ④ ■ すべての方面に依頼心が強いが，一つは幼稚園生活をしてきているために先生に慣れ過ぎている点もあると思う。
- ⑤ ◇ 幼稚園ではこの問題については，相当の注意をはらって，保育したはずであるのに解答の結果は，自治心の養われていると，反対に依頼心の強いものがほとんど同様な数字に現れたり。
- ⑥ ◇ 幼稚園に入る者は，余裕のある家庭，またその幼稚園のある場所によっては有産階級の属する家庭，（中略）確かに家庭の影響あろうが，幼稚園で保育した以上は，保育者の責任として，我々大いに考えなければならない。

#### 【友達との調和性】

- ⑦ ○ 友達に対する調和性はよほど優れているゆえ，社交性にたけている。
- ⑧ ○ 社交性は相当訓練されているが，言いつけ口，おせっかい等の傾向あり。
- ⑨ ■ 調和性はあるが，世話やき，つけ口するものあり。
- ⑩ ■ 喧嘩が多くなった。ただし，その反面，友達の世話をしすぎる傾向あり。

#### 【衛生上の習慣】

■ 手を洗うこと、口をすすぐこと、ハンカチをもつこと、自分から行く。

◇ 数々の事例によっても知られるが如く、幼稚園時代についた良習慣が1年後まで崩れることなく、他児の模範となっていることは、実に喜ばしい。

### (3)「体力方面」に関する調査事項

#### 【体力】

○ 急に園体生活に入りたる一般児童に比較して、体操遊戯等の場合、疲労の度が少ない。

「訓練及び体力方面」の各項目については、調査結果から概ね幼稚園児の優位性が見られる。【後始末】や【物を大切に使う】では①及び②の意見にあるように幼稚園での遊びや生活の積み重ねの中で、後始末をすることや物を大切にすること等の基本的な生活習慣の形成が図られるとともに、日常的な自然とのふれ合いや友達との遊びの繰り返しが体力の向上にもつながっていたものと考えられる。

注目したいことは、③、④、⑤にあるように「自分のことは自分です」と「依頼心が強い」との割合が拮抗していることである。その理由として⑥のように幼稚園の指導のみならず、恵まれた家庭環境の影響をあげていることが特徴的であり、環境というファクターが幼児や児童の発達に影響を与え、自立と依頼心という相反する姿となって体現化されることの重要性を改めて感じるものである。

また、【友達との調和性】については、入学当初から幼稚園児の優位が数値的にも示されているが、1年後の実例及び意見の中には、⑧、⑨、⑩のような記述が見られる。これは、否定的な見方として捉えることもできるが、一方で児童の発達段階から考えて成長過程の一通過点の姿とも考えられる。目の前にいる児童の姿をどのように捉えるかは、当時の教師の児童観や教育観が大きな影響を与えているものと考えられる。

## 4 幼稚園教育と小学校教育との「同じ」と「違い」

本稿では以下に示す3点の記述内容から、幼稚園と小学校が共有しようと努力しお互いが求めていること（同じ）、双方がそれぞれの「違い」として認識し、その違いを理解した上で教育を展開するべきであると主張したこと（違い）について考えてみたい。

- (1)「小学校における幼稚園児の取扱い」
- (2)「幼稚園より小学校に対する希望」
- (3)「尋常小学校より幼稚園に対する希望」

### (1)「小学校における幼稚園児の取扱い」

本調査では【表1】3のように「小学校における幼稚園児の取扱い」について3点問うてい



る。本稿では、その中でも特に「(1) 幼稚園保育を受けた子供に対して、どんな点を考慮してご指導でしょうか？」という調査事項に着目し、小学校における指導上の配慮事項や当時の教員の認識（教育観等）について考えていくこととする。

【表5】＜「小学校における幼稚園児の取扱い」より一部抜粋＞

【学習指導上の主な意見等】

- ① 急激な変化を与えぬように徐々に学習態度を訓練する。
- ② 幼稚園での遊びを中心とした子供の生活を活かしながら、その中に学習を織り込んでいく。
- ③ 保育によりて養成された自然の愛好心、審美心、創作力、構成能力等を小学校の時間割、学課等による規律的、組織的生活に破壊せざるよう努力す。
- ④ 勝手に離席するもの、勝手に発言するものの数は家庭児より多いが、急に抑制すべきでないと考えている。

【訓練上の主な意見等】

- ⑤ わがままにならぬよう、規律よくさせ、遊ぶことと学習することとは、はっきりと区別させる。
- ⑥ 保育によりて得た園体的訓練及びその他の長所を基礎として個性を伸ばし、児童の生活を発展させていく。
- ⑦ 幼稚園にて保育された訓練方面を一層伸展させてゆく。
- ⑧ 他人に対して世話をやき過ぎぬよう指導なす。

【環境上の主な意見等】

- ⑨ 個性を尊重し、純心を傷つけぬように。
- ⑩ 身体養護における良習慣及び情操的部面を助長し、他生をして追隨せしむるよう留意する。

自治的態度の育成に努ると共に、極端な干渉をさける。

【その他の主な意見等】

- ⑪ 父兄にも幼稚園に対する認識を是正し、小学校1年の仕事と幼稚園との区別を判然とさせるよう指導したい。
- ⑫ 小学校における指導に順応する傾向が少ないので、一日も早く、学校生活になれさせるよう留意する。(小学校と幼稚園の指導に懸隔をみつむ)

小学校における児童の様子について主に「学習指導上」「訓練上」「環境上」の3点から意見が述べられているが、その内容からある程度共通した考え方をみることができる。

具体的には、②、⑥、⑨の意見であるが、幼稚園教育が大切にしてきた「遊び」「生活」「個

性を尊重」等のキーワードが含まれている。また、訓練や環境上の主な意見として⑦や⑨など、幼稚園教育のよさを引き続き小学校生活でも継続していこうという姿勢がみられる。この点については小学校サイドが指導上、できるだけ一貫して、継続すべき基本的な姿勢や内容であると捉えているとともに、双方が同様に共有すべき指導上の留意点でもあるという「同じ」認識があったものと考えられる。

その反面、④、⑤、⑧、⑪、⑫など、小学校が幼稚園サイドに対して一貫してもっていた「違い」としての見方がある。日常の児童の様子から、学習中に「勝手に離席、勝手に発言」や「わがまま、規律」「世話をやき過ぎ」等のキーワードから主に訓練上の課題をみることができる。その背景には⑪や⑫にあるように「遊ぶことと学習することとは、はっきりと区別させる。」という小学校にある「区別」という認識を垣間見ることができる。また、⑫の「小学校と幼稚園の指導に懸隔をみとむ」の意見からも双方の教育の間には教育方法の違いが認識されており、この認識は教師が指導上留意したい内容や方法と表裏一体の関係にある。

幼稚園教育の基本は幼児が自分から進んで動き出したいくなるような教育環境に基づく教育方法であり<sup>6)</sup>、幼児の興味・関心の方向に自由に向かわせながら、その過程における体験を通じた学びを大切にするという考え方である。当時の幼稚園教育は幼児のありのままの生活が尊重されるとともに自発的な活動が重視されており、倉橋惣三の「幼児の生活を充実させる」という保育理論が背景となって受け継がれてきたものと考ええる。<sup>7)</sup>

「遊ぶことと学習すること」「小学校1年の仕事と幼稚園との区別を判然とさせる」という意見からは、「遊び」と「学習（仕事）」は区別すべきものであるという小学校サイドの認識があり、幼児のありのままの生活を尊重することを第一義とする幼稚園教育の考え方とは明らかな違いがある。

## （２）「幼稚園より小学校に対する希望」

東京市保育会は「幼稚園より小学校に対する希望」と「尋常小学校より幼稚園に対する希望」について調査している。幼稚園が小学校に対して希望している内容は次の通りである。

【表 6】「幼稚園より小学校に対する希望」より一部抜粋

- |  |
|--|
| <p>4 幼稚園として小学校に対する左の希望についてのご意見をご記入ください。</p> <p>1. 幼稚園と合同して児童に関する研究会または懇談会を開催されたし。</p> <p>① 訓導と保母が子どもに関した事柄を打ち明けて話し合って、教育上の資料とすることは必要だと思う。教育の目的に於いて、何の異なることがあろう。</p> <p>② この時代に於ける教育は一生を通じて最も陶冶され易い時期であるだけに、幼稚園と小学校との連絡を密接にして、一貫した教育方針のもとに指導することが必要である。</p> |
|--|

- ③ 訓導は幼稚園教育の目的及び内容の如何を又保母は1年生の教科の教授過程等を十分に認識して、その指導方法の懸隔を少なくする様努めることが大切である。
2. 低学年担任訓導に保母の参観の交換会を開催されたし。
- ④ 小学校教育と幼稚園教育は、具体的な手段方法に於いて、自らその内容を異にするものと思う。
- ⑤ 小学校に於いては、子どもの能力を陶冶して或る標準までは無理にも引き上げて行こうとする積極的な態度が必要であるに反し、幼稚園に於いては子どもの生まれつきもつ遊びの本能を整理して、調和のとれた心身の発達と、善良なる性情を培って行こうとするのである。
- ⑥ 双方互いに暇をつくって生活状況を参観して、仕事の内容を理解し合うことは年齢の接近した低学年児童及び幼稚園幼児の密接なる連絡を図る上に最も大切である。但しその方法については、大いに研究すべきである。
3. 1年生の学習を合科的に考慮せられたし。
- ⑦ 子どもの生活に即し、学習作業に変化と発展を考慮し、さらに心身の発達に無理を少なくして総合学習することは、知能及び人間教育の行わるるゆえんにして合科的取扱いの必要とするところである。
- ⑧ 幼稚園より小学校児童としての第1学期間の生活連続は、極めて自然に合科的にならざるを得なく、その色彩も濃厚である。但し各教科のもつ目的達成のため、次第に分科的取扱いをなす様になる。

1については、①、②から当時の小学校では研究会や懇談会を合同で開催することや連携を図りながら効果的な指導を展開していこうという意義について共通の認識があったと考えられる。特に「連絡を密接にして、一貫した教育方針のもとに指導する」の意見から、当時は幼稚園と小学校の連携・接続を比較的好意的に捉えていたことが伺える。

その一方で③のように双方の指導方法の違いに着目し、一貫した教育方針のもとに指導することの困難さについても認識しており、その懸隔を埋めるためにお互い努力していこうとする姿勢も見られる。

2については、参観交換会や密接に連絡を図ることの意義を認めつつも、双方の教育に関する手段や指導方法の違いについても言及している。教育方法に違いがあるというその当時の現実的な認識は、今日の幼小連携・接続の問題と軌を一にする歴史的な課題であると言えるであろう。

3については「合科」に関する考え方が述べられている。幼児から児童への心身の発達を考慮し、小学校の各教科の指導について「合科から分科へ」と生活の連続性を踏まえた学習を展開すべきとの考え方である。現在の生活科の指導においても合科的・関連的な指導は重要視されている。思考と活動が一体的な低学年児童の発達段階を考えた場合、当時から言われている

合科的な指導の必要性は、効果的な指導方法として今日的な視点からも価値ある提案であると考ええる。

### （３）「尋常小学校より幼稚園に対する希望」

小学校より幼稚園に対して希望している内容（意見及び事例）については、様々な意見を分類し「保母に関して」「保育内容に関して」「しつけ方に関して」「養護に関して」「その他」の５項目に整理されている。

本稿では、特に保母、保育内容、しつけ方の３項目に着目し、主な意見等を紹介する。

【表 7】「尋常小学校より幼稚園に対する希望」より一部抜粋

#### ＜保母に関して＞

- ① 保母の素質向上に心がけたし。
- ② 保母は小学校低学年の授業を参観し、教科書にも目を通して、小学校教育の内容をも承知する必要あり。
- ③ 理論と實際を深く真剣、不動、不拔の信念の上に立つ保育をされる様、研究をのぞむ。

#### ＜保育内容に関して＞

- ④ 日常の保育を小学校の学科の指導にまで立ち入らざるよう、すなわち知的指導の部分を減じ、入学後の慢心を防ぐよう努力されたし。
- ⑤ 子どもの生活をそのまま実践させることが、子どもの生活を向上させる所以である。図書、手工なども、子どもの思想や個性がそのまま表現されるよう、創作的に指導して欲しい。家庭の意欲に迎合して技巧中心にならぬよう注意されたし。
- ⑥ 製作作業は、結果より過程を重んぜられたし。
- ⑦ 見る態度、話す態度、聞く態度、作業する態度等、基礎的指導に一層注意されたし。
- ⑧ 文字や数の勘定等は強いて教えぬよう。
- ⑨ 現在の小学校組織より見て幼稚園修了前に於いては、分科的学习を加味され、よりよき学習態度を作らるるよう、注意されたし。
- ⑩ 唱歌遊戯は明朗なるものを選び、その要目を小学校と連絡して系統的にされんことを望む。

#### ＜しつけ方に関して＞

- ⑪ 子どもの取扱いがあまりにも親切に過ぎ、あまやかし過ぎはせぬか、そのためか依頼心が強い。
- ⑫ 幼稚園教育を受けた子どもは、一般に他の子どもに比べて我がままで、おせっかいで、気が散りやすい。特に行儀作法に注意されたし。

- ⑬ 訓練は自由の中に統制を要求する。のびのびとした中に、ある程度の鍛錬も必要であろう。
- ⑭ 手工や図書を指導するよりも、訓練に重点をおき大自然に親しむ機会を多く作られたし。

「保母に関して」は、小学校における主たる教材である教科書を通して、小学校の学習内容を理解していくことが述べられており、保母に対して小学校教育への理解を促している。

また、「保育内容に関して」は、幼稚園と小学校の学習方法の違いや指導内容の系統性等を考慮した教育の展開を求めている。特に④、⑦、⑧、⑨では小学校において指導すべき内容や学習態度等が指摘されており、一定程度、幼稚園教育とは区別すべきという考え方を見ることができる。

その一方で⑤、⑥、⑩からは、特に子どもの生活の向上や個性を重視すること、製作作業のプロセスに重点をおいて評価すること等、小学校サイドとして可能な限り幼稚園教育のよさを引き出し、相互に認め合おうという姿勢や認識を伺い知ることができる。

「しつけ方に関して」は、わがままやおせっかい、行儀作法に着目し、⑬のように「のびのびとした中に、ある程度の鍛錬も必要」という基本的な考え方のもと、訓練に重点をおく教育の必要性を説いている。また、「批判及び反省」には、次のような記述がある。

**【表 8】「尋常小学校より幼稚園に対する希望」より一部抜粋**

- ⑮ 全体を通して小学校側に於いて伝わんとする所は、いずれも幼稚園児が豊富な生活経験を持つために、又園体的生活に慣れきっているために、学習指導上種々な困難を伴うところから、学習態度に多くの悪い実例を示されて幼稚園側に反省を促している。
- ⑯ 小学校側としては、その学級経営上、級の成績如何に全力をそそがれるのは当然のことながら、眞の幼児教育の立場から、入学当初は努めて個人的指導に重きをおかれ、遊びの誘導にも、生活訓練にも充分なご考慮をほどこしたい。
- ⑰ 幼稚園側としても、これら学習の基礎ともなるべき諸事項の実例を再度反省し、「幼きが故に」との通念から知らず知らずの内に陥り易い種々の欠陥を、保母たる者、心して考えねばならぬことと思う。重圧に努力、邁進すべきである。
- ⑱ いずれにせよ、現在の小学校低学年教育の内容と幼稚園教育の内容とに、ある懸隔のあることを認められるのはやむを得ざる事にて、一日も早く幼稚園教育に義務制の決定されん事を望む。それは小学校と幼稚園とを結ぶ何よりの方法なり。

幼稚園が有する豊富な生活経験を大切にするというメリットを踏まえつつ、一方でその慣れた生活経験がそのまま小学校に持ち込まれることを危惧している。教科学習を中心とした小学

校教育は学習指導上における姿勢や態度について、幼稚園教育とは明らかな認識の違いがある。入学当初の指導の在り方については、小学校サイドとして個性を生かす視点から個人的な指導を重視しつつも、小学校生活との関連から遊びの誘導や生活訓練の程度について留意していることが伺える。

この点について、幼稚園サイドは⑬の「幼きが故に」という認識から、日常的な保育の中であまりにも親切やあまやかし過ぎぬよう、「保母として心して考えねばならぬ。」と自らの戒めとして捉えている。これらの意見からは、双方が遊びを通した援助と学習活動に対する指導について、指導方法のレベルでの滑らかな移行を目指しつつも、なお葛藤し模索している姿を読み取ることができる。

さらに⑭「ある懸隔のあることを認められるのはやむを得ざる事」にあるように、幼稚園教育と小学校における低学年教育の接続について懸隔があることを認めている。このように「懸隔を認める」意見については、学習態度等に関する考え方や教育方法の違いから、双方に避けがたい認識上の対立があったものと考えられる。

また、「幼稚園教育に義務制の決定されん事を望む。」との意見がある。今日、教育再生実行会議が進めている「今後の学制等の在り方について（第五次提言）」では、幼児教育の機会均等と質の向上の視点から「幼児教育の義務教育化」の検討が提案されている。<sup>8)</sup>幼稚園教育の先駆者とも言える倉橋惣三は、幼稚園と小学校の結び付け方について、次のように述べている。

**【表 9】「幼稚園から小学校へ：幼稚園と小学校幼年級の真の締結」より一部抜粋<sup>9)</sup>**

幼稚園と小学校とを離さないで結び付けて行こうとするには、二つの方法があります。一つは教育行政の上から教育系統というものを立て変えることであります。それから一つは教育の行政に於ける系統は必ずしも幼稚園と小学校とを一つに結び付けなくても、その教育の方法に於いてその関係を見出していくということです。

大正時代に倉橋はすでに幼稚園と小学校の結び付け方として、「教育行政の上から教育系統というものを立て変える」という幼稚園の義務教育化の考え方を示している。加えて「教育の方法」にも着目しており、いずれも今日的な視点から歴史的に価値ある提言であると考えられる。

## 5 今日の視点から

本稿では昭和初期（昭和14年）「幼児の教育」に掲載された東京市保育会の資料調査をもとに、当時の幼稚園と小学校の連携・接続に関する双方の認識を探ろうとしてきたが、調査結果の実例や意見等からは今日の幼小の連携・接続の問題と相通じるものを見ることができる。

一つ目は幼稚園と小学校の教育方法の違いからくる相克である。幼稚園教育の基本は「環境

を通した教育」であり、教育のねらいや目標を学習環境に反映させることによって、幼児の主体的な活動を誘発しようとする間接的な教育方法である。これに対して小学校教育は教師のねらいや意図を直接指示したり、問いかけたりすることで行われる直接的な教育方法である。<sup>10)</sup>

【表6】⑤にあるように「小学校に於いては、子どもの能力を陶冶して或る標準までは無理にも引き上げて行こうとする積極的な態度が必要であるのに反し、幼稚園に於いては子どもの生まれつきもつ遊びの本能を整理して、調和のとれた心身の発達と、善良なる性情を培って行こうとするのである。」と述べられており、双方の教育に関する認識の違いが浮き彫りとなっている。また、幼稚園の保育内容について、④や⑦のように学習態度や指導内容にまで踏み込んだ指摘があることから、双方の認識には大きな相克があったことが伺える。この指導形態や教育方法、教育観の違いを如何に乗り越え発達や学びの連続性を担保していくかが、今日的な視点からも歴史を超えた大きな課題であると言える。

二つ目は、幼小の滑らかな接続の観点から、双方が共有できる幼児や児童に身に付けさせた力を明らかにしていくことである。幼稚園と小学校の滑らかな接続のためには、双方が目指すところの子どもの姿や育てほしい子どもの態度・能力を明確にし、子どもの変容を双方が同じ指標で見取ることが必要である。本調査の「学習態度」「訓練方面」「体力方面」の各項目は、幼小が共有して育成すべき資質・能力として捉えることができる。具体的には「注意力」や「創作力」、「想像力」、「後始末をよくする」、「自分のことは自分でする」等が調査事項としてあげられており、用語の定義は明確にされてはいないが、能力育成や態度形成に関する項目が設定されている。これらの項目は今後、具体的な子どもの姿を見取る指標や能力育成等の効果測定の観点として活用できる可能性があり、今日的な視点からも示唆を得ることができるものと考ええる。

三つ目は生活科を中核としたカリキュラム開発の問題である。当時の幼稚園サイドには「1年生の学習を合科的に苦慮せられたし。」という願いがあった。思考と活動が一体的な幼児や小学校低学年の児童においては、発達や学びの連続性を踏まえながら教育活動を展開していくことが望まれる。

本調査でも【表6】⑧にあるように合科的に取り組むことの重要性は認識されていたと考えられる。しかし、続いて「但し各教科のもつ目的達成のため、次第に分科的取扱いをなす様になる。」との意見が記述されていることは、合科から分科への滑らかな移行を同時に求めている小学校サイドの考え方があり、連携・接続を意図したカリキュラム開発の大きな課題である。

このような課題に対して、現在の「生活科」はこれまでも大きな役割を果たしてきたものとする。生活科は遊びを教育活動として位置付け、かつ合科的・関連的な指導を方法論として重視している教科である。幼稚園教育の領域と生活科の目標・内容との関連から考えた場合、今後のアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの開発には大きな可能性がある。本来、校種間の連携・接続の理念・目的は、各校種の滑らかな接続、移行を通して、双方の教育の質の向上を図ることである。<sup>10)</sup>その意味で生活科の特質を活かした接続期の「つながりのあるカ

リキュラム開発」は、歴史が問いかけた大きな課題である。

今後はさらにカリキュラム開発のプロセスを幼稚園教諭と小学校教諭が対話を重ねながら共有し合い、教育方法の違いを乗り越えた実践的なカリキュラムの構築を目指していくことが重要であるとする。

### 【巻末資料】

本稿では1939年（昭和14年）に「幼児の教育」に掲載された「幼稚園と尋常小学校との連絡に関する資料調査（上・中・三・四）」（東京市保育会）の調査結果をもとに分析・考察を行った。

学習態度に関する調査事項の解答校数及び百分比は次の通りである。

(一)學習態度に關する調査事項(調査表一)

																				入學當初		一年級	
事項																				解答 校數	百分比	解答 校數	百分比
(1)																				三	五七五	五	四二五
注意力 集注する あきやすい																				四〇	五・二八	九	二・五四
(2)																				七	八九九	八	二〇二六
著眼點よろし																				五	六七九五	七	四七二六
(3)																				二〇	二五六四	二五	三三〇五
變りやすい																				五	六四二一	二	六四二一
(4)																				三	四七四四	三	二四〇一
實行力がある																				三	四七四四	三	二四〇一
(5)																				一	二一六	三	二四〇一
途中で飽きる																				一	二一六	三	二四〇一
(6)																				八	二〇二六	八	二〇二六
同答なし																				八	二〇二六	八	二〇二六
(7)																				二	二五八	二	二五八
模倣的である																				二	二五八	二	二五八
(8)																				二	二五八	二	二五八
同答なし																				二	二五八	二	二五八
(9)																				六	七六九	七	八八九七
想像力がある																				六	七六九	七	八八九七
(10)																				六	七六九	七	八八九七
乏し																				四	五二三	二	二六四一
(11)																				四	五二三	二	二六四一
同答なし																				四	五二三	二	二六四一
(12)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(13)																				七	八九七	三	二七七八
學習に興味がある																				七	八九七	三	二七七八
(14)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(15)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(16)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(17)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(18)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(19)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八
(20)																				七	八九七	三	二七七八
同答なし																				七	八九七	三	二七七八

### ＜引用及び参考文献＞（引用文献にはページ数を記載）

- 1) 倉橋惣三「幼稚園から小学校へ：幼稚園と小学校幼年級の眞の聯結」「幼児教育」1923年
- 2) 小学校学習指導要領解説「生活編」平成20年8月 文部科学省
- 3) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」平成22年11月11日
- 4) 国立教育政策研究所「幼児期から児童期への教育」平成17年2月，P20
- 5) 4) P20
- 6) 木村吉彦「幼児教育と小学校教育をつなぐスタートカリキュラム～スタートカリキュラムの意義について」初等教育資料2014. 12月号，P3



- 7) 文部省「幼稚園教育百年史」昭和54年8月30日，ひかりのくに
- 8) 教育再生実行会議「今後の学制等の在り方について（第五次提言）」平成26年7月3日
- 9) 1) P134
- 10) 酒井 朗，横井紘子著「保幼小連携の原理と実践～移行期の子どもへの支援」 2011年9月20日，ミネルウェア書房，P72